

Y16a 日本宇宙科学の黎明期の調査—ペンシルロケットの発掘と鑑定

阪本 成一 (宇宙航空研究開発機構)

日本の宇宙科学の歴史は1955年4月に東京大学生産技術研究所が行ったペンシルロケットの水平試射実験にさかのぼる。グループを率いた糸川英夫教授が2012年7月20日に生誕百年を迎えるにあたり、宇宙航空研究開発機構では相模原市立博物館と協力して企画展「宇宙科学の先駆者たち～糸川英夫と小田稔～」を2012年7月14日から9月2日にかけて開催した。

展示の一つの目玉はペンシルロケットだが、数多く作られ、試験も多くが陸上で行われて機体が回収されたにもかかわらず、その実機を見る機会は多くない。常設展としては永らく、国立科学博物館と、日産荻窪工場跡地の「ロケット発祥之地」碑に埋め込まれたものがあるのみだった。しかもペンシルロケットは一種類ではない。全長23cmの標準型だけでなく、全長30cmのペンシル300や、下段にブースターをつけた2段式ペンシル、ブースターを3つ束ねたクラスターペンシルなどが知られている。また、同じ標準型でも、ノズル形状や先端部分の材質、尾翼の取付角が異なるいくつかの組み合わせがある。

そこで、これを機に所在確認を進めた結果、最終的にはスタンダードペンシルを10機(国分寺で実射された記録が残るもの2機を含む)、ペンシル300を1機、2段式ペンシルを2機、クラスターペンシルを1機、展示することができた。存在が確認されながらお借りできずに終わったものや、別の場所で保管されているもの、その後発見されたものを含め、所在確認と鑑定の結果について報告する。